慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	会話の応答に見られるメタ言語表現 : シナリオを例として
Sub Title	
Author	田中, 妙子(Tanaka, Taeko)
Publisher	慶應義塾大学日本語・ 日本文化教育センター
Publication year	2018
Jtitle	日本語と日本語教育 No.46 (2018. 3) ,p.31- 44
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-20180300-0031

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大学　日本語・日本文化教育センター紀要
『日本語と日本語教育』46：31–44（2018.3）

会話の応答に見られるメタ言語表現

―シナリオを例として―

田　中　妙　子

1.　はじめに

会話はしばしば複数の参加者が相手の発話内容に何らかの応答を行うことで連鎖を続ける。その場合、我々は、相手が伝達しようと意図した情報以外の別の側面に言及することがある。例えば、「和食、好き？」という相手の問いに対し、好きか否かを直接答えるのではなく、「どうして急にそんなこと聞くの？」「漠然と和食って言われても、答えにくいよ」などという答え方をする場合である。

本稿では、我々が会話の中で、相手の発話の何に関心を持ち、何を言語化していくのかという点について、シナリオから採取した用例を検討しながら考えてみたい。

2.　メタ言語表現に関する先行研究

言語の一つの働きとして、メタ言語表現、あるいはメタ言語行動と呼ばれるものがある。すなわち、自分あるいは他者の発話について言及する機能を持つ表現、またはそれを伴う言語行動のことである。本稿の考察にはこの考え方が有用であるため、まず先行研究を概観する。

Jakobson（1980　池上・山中訳 1984）は、言語的伝達とは、「送り手」が「受け手」に対して「メッセージ」を送ることであるとし、その伝達が十分に機能するためには、送り手と受け手の間に言及される「場面」があり、その場面に言及するために送り手と受け手が共通の「コード」を用い、両

者間の「接触」を可能とさせる物理的・心理的なつながりが存在するという条件が必要であるというモデルを示している。そして、コードについては、言語そのものの外にある事象について語る「対象言語」とコード自体について語るための「メタ言語」とを区別する必要があると述べている。

Stubbs（1983, 南出・内田訳 1989）は Jakobson（1960）[1]、Hymes（1962）[2] が分類した言語の機能のうち、「接触的機能」「メタ言語的機能」「詩的機能」を「伝達についての伝達」であるとし、「発話場面を言葉によって調整する」（p. 58）メタコミュニケーションとして再分類した。そして、メタコミュニケーションの例として以下のものを挙げている。

> 伝達回路についてのメッセージ／その回路が開いて作用しているかのチェック／伝達をスムーズに進行させる働きをするメッセージ／誰がどれくらい話すかの決定／話し手が話すのをやめる、あるいは相手の話に割り込むことを知らせる合図／メッセージが受信され理解されたかどうかのチェック／受け入れ可能な伝達の内容のチェック

第一義的なメタコミュニケーション機能は「伝達回路の働きを調整し、使用された言語の意味を明確にし系統化し直す」（p. 65）ことであると述べているが、明確な定義はされていないため、メタコミュニケーションとして扱う発話の具体的な範囲は明らかではない。しかし、日常会話のデータ分析において、目的言語（object language）とメタ言語（metalanguage）を区別すること、言語の使用（use）と言及（mention）を区別することが必要だと言う Stubbs の主張は、一つの視点を示すものであると考える。

日本語研究では、杉戸（1983）が待遇表現としての言語行動を考える際、「言語行動をその成立要素の観点からみる立場」（p. 32）をとり、Hymes（1972）[3] の提案した言語的コミュニケーションの成立要素を基に、言語行動の成立要素を 12 の項目に分類している。そして、それらの要素に言及する言語行動は、「明言された言語表現であること、言語行動主体がみずからの言語行動の何らかの側面について言った（書いた）言語行動であるという、メタ言語行動としての性格において共通性をもつ」（p. 34）と述べ

ている。

杉戸（1983）の言語行動の 12 の成立要素は以下のとおりである。

①言語行動の主体　②言語行動の相手　③言語行動の機能上の種類　④言語行動のジャンル　⑤言語形式・言語表現　⑥表現の素材・話題　⑦表現の調子　⑧物理的場面　⑨心理的場面　⑩接触状況・媒体　⑪言語行動の目的・動機　⑫言語行動の結果・効果

また、杉戸（1989）では「談話の進め方・規範」「言語行動に随伴する、非言語行動、副言語的行動」も成立要素として追加されている。

更に、杉戸（1989）では、メタ言語表現を「気配り」と関連付け、「表現・伝達の過程とその内容の調整に配慮したメタ表現」「人間関係の調整に配慮したメタ表現」「言語生活上の規範に配慮したメタ表現」の三つに分類しており、この分類がその後のメタ言語表現研究にも影響を与えている。

具体的な談話分析の中でメタ言語表現を扱ったものとしては、古別府（1997）の研究報告場面、西條（1999）の討論場面、中井・寅丸（2010）の講義場面の分析などが挙げられる。いずれも説明や主張を主な目的とした言語行動を分析対象としており、談話の構造化（西條）、伝達過程の調整と対人関係の調整（古別府）、談話展開における機能（中井・寅丸）などの観点からの考察が行われている。

日常会話におけるメタ言語表現の分析としては、シナリオを用いた李（2013）、佐々（2015）などが挙げられる。李（2013）はメタ言語表現の談話展開機能に注目し、それが伝達過程の調整や人間関係の調整にどう関わっているかを分析している。佐々（2015）は、会話参加者の間に意見の相違や論争があるコンフリクト時に、発話者が自分の発言に対してどのように言及するかということを「言う／申す／しゃべる／相談／説明」等、発語内行為を示す語彙が含まれる発話に限定して観察している。佐々は「これまでメタ言語表現というと、配慮という観点が強調されてきた。（中略）しかし、コンフリクト状態を作ろうとしているのにも関わらず、あえて対人

関係調整機能のメタ言語表現を使用せず、伝達過程調整機能のメタ言語表現のみを使用し、自分の主張をする用例も多く見られた。」（p. 30）と述べている。

3.　応答のメタ言語表現

日常会話において、談話を構成・展開するための言語行動や対人関係を意識した言語行動は一方的なものではなく、双方向的なものである。ここでは、従来の研究の対象とならなかった聞き手の応答に見られるメタ言語表現を取り上げ、どのような特性があるかについて検討したい。現段階では用例数が不十分であるため、本稿ではメタ言語表現の機能を分類する端緒として、聞き手が応答する際、相手の発話の何に注目してメタ言語表現を用いているかを観察する。分類の大枠は、杉戸（1983）、杉戸（1989）で示された言語行動の成立要素を用いる。

ここではメタ言語表現を、自分または相手の用いる言語コードについて言及する表現とし、分析の記述のために、会話参加者の一方が何らかの発話を行い、もう一方がその内容に応答するという発話連鎖を「第一発話」と「応答」というように分ける。そして、第一発話を行う者を「第一発話者」、それに対して応答する者を「応答者」と呼ぶ。また、応答を向ける先を「応答者」の「相手」と呼ぶ場合もある。二者間の会話の場合は「第一発話者」と「相手」が一致するが、三者以上が参加する会話の場合は「第一発話者」と「相手」が一致しない場合もある。つまり、発話者 A（第一発話者）の発話を聞いた発話者 B（応答者）が、発話者 C（相手）にメタ言語を用いた発話を向けるという場合があるということである。また、「第一発話」は必ずしも一回のターンとは限らず、複数のターンによって構成される場合もある。

4. 分析

以下の用例では、問題とするメタ言語表現を下線で示す。また、[　]に筆者が内容理解のための補足情報を加え、【　】に用例の略称を記す。略称の一覧は稿末に記す。

4-1 言語行動の機能上の種類

例 1 ［耕介は知り合った女性を樋口に紹介したくない。］樋口「紹介してくれよ」耕介「駄目に決まってるだろ」樋口「なんで」耕介「ロクなことないから」樋口「そんなことよく言うよ。かわいいのか？」耕介「美容院でアシスタントをやってる」樋口「答えになってないよ」【今夜 20】

例 2 ［フミが母親に質問するのを聞いたゴンゾが発話する。］フミ「おかしゃん、おとしゃんのどこが好きだったの」ゴンゾ「いい質問だねー、核心ついてるねー」【毎日 25】

例 3 山路「…あの、私が『どうして』と聞いたのはそういう意味じゃなくて、どうして、井上彩香が下山エレンのカラーペンを隠したと言い切れるのか、という意味です」【ゆとり 85】

例 4 ［美知子は、理沙が美知子の恋人の健次とプリクラから出て来るのを見る。］美知子「なにそれ。なにやってんの？」理沙「美知子、これあれだから……」美知子「うるせーよ！」理沙「……」美知子「なにしてんのって聞いてんの」健次「え、だから、プリクラ撮ろうかなって…」美知子「そんなの見りゃわかんだよ。もう撮り終わってんじゃん」【神聖 50】

いずれも言語行動の機能に関わる言及である。例 1 と例 2 は第一発話者の発話の機能、すなわち「答える」「質問する」という機能に関する言及をしているのに対し、例 3 と例 4 は応答者が第一発話者の発話内容に満足できず、自分の言語行動の機能、すなわち「意味する」「聞く」という機能に言及することによって、再度相手から別の発話を引き出そうとしている。

4-2　言語形式・言語表現

4-2-1　語形・文法

例 5　静磨「決まってんじゃねえか、おととし前つけてもらうよ！」佐倉「『と』が一つ多い！」【ゆとり 117】

例 6　ブンジ「ねえねえ、おとーさん、いつ帰って来たの」サイバラ「帰って来たじゃなくて、帰って来るでしょ」【毎日 29】

語形や文法に関する言及をする例である。例 5 は第一発話者が「落とし前」を「おととし前」と語形を誤って発話したことを指摘しており、例 6 は第一発話者が「父親が帰って来る」を「帰って来た」と誤って発話したため、文法を訂正している。

4-2-2　表現方法

例 7　［正和はまりぶに腹を立てていたが、まりぶが真面目に受験勉強をしていることを知る。］正和「なんか…いろいろ誤解してました」まりぶ「ちょっと、いつから敬語？」【ゆとり 68】

例 8　雷音「え、ここの？」善「だからなんだ」雷音「面接」善「面接？」雷音「タウン誌で募集しなかったですか、長野市の」善「じゃなくて、面接に来ましたってなんで言えないの」雷音「あぁ、そういうこと。その子鹿も大きくなったら食べちゃうの？」【大鹿 105】

例 9　［兄の妻のみどりが正和の脱いだ靴下を拾って洗濯しようとしているところへ、兄の宗貴が来る。］ゆとり「自分でしなよ、家政婦じゃないんだよ」正和「おい！…すいません（と靴下に手を伸ばす）」みどり「（離さない）いいのよ、ついでだから」宗貴「なんだ？　どうした」和代「家政婦がどうとか…」正和「母ちゃんもさあ！　なんで断片だけ言うかなあ…」宗貴「（正和に）おい、どういうことだ」みどり「いいんですよ」宗貴「家政婦じゃないぞ！　みどりは！」正和「言ってないよ」【ゆとり 63, 64】

例 10　［山路が正和の恋人を「茜ちゃん」と呼んだ。］正和「あんたが黙っ

て…ていうか、茜ちゃんてなに！？」山路「え？」正和「茜ちゃんて呼んだよね、山路くんさっき、茜ちゃんのこと、まあ、茜ちゃんなんだけどさ、でも茜ちゃんて呼ぶ？　茜ちゃんのこと、たった1回遊んだだけで」山路「え？　ああ、そっすね」正和「え、それだけだよね」山路「あー…うん、ごめんごめん」正和「え、なに今の変な間」【ゆとり99】

メッセージをどのような表現方法で伝えているかに言及している例である。例7は第一発話者がそれまでのぞんざいな話し方とは異なり、「～ました」という丁寧語を使い始めたことに言及し、例8は「面接」と単語だけで説明しようとする第一発話者に「面接に来ました」と文で説明するよう求めている。これらは待遇表現に関わる言及とも言える。例9は第一発話者が情報を完全に伝えず、「家政婦がどうとか…」という曖昧な情報で終えていることを指摘し、例10は、第一発話者が滑らかに発話をせず、不自然な間をとったことを指摘して、情報の伝え方の不備に言及している例である。

4-2-3　表現選択

例11　［口の悪いまりぶが正和の母親にビールを注ぐよう促す。］まりぶ「注げよババぁ！」正和「ババアはちょっと…ないわ」【ゆとり106】

例12　［茜がステーキ肉の焼き方の好みを聞くが、正和は悩み事があり上の空になっている。］茜「焼き方は？　レア？　ミディアム？　ねえ、まーちん」正和「どっちでも」茜「…あ、三連休あるじゃーん、ねえどっか行かない？　温泉とか有給使って遠出しようよ、それか物件見に行く？　吉祥寺にいいのあったよ2LDK（舌打ち）…いつまで引きずってんだよ」正和「……」茜「何？　どっちでもって。ここ私ん家！今二人の時間！　肉の焼き加減より重要なことはない！」【ゆとり56, 57】

例13　［古美門は弁護士で、学校のいじめ問題を調査している。黛は古美

門の事務所に雇われている。］古美門「遠慮なくこの場で聞けと仰ったのでお言葉に甘えます。青山瞬、高木健人、佐々岡耕介、金森信、どうやって屋上から小暮和彦を落とした？　普段から彼にどんないじめをしていた？」青山ら「……」黛「先生、そう言う言い方は……」【リーガル 104】

例 14　［法廷でのやりとり。勅使河原と黛は弁護士で、別府は裁判長。］勅使河原「ほお、つまり今君が話した事は、弁護士による誘導によって形成された記憶だと……」黛「異議あり！　誘導という表現は不適切です！」別府「被告代理人、表現を変えてください」【リーガル 112】

例 15［耕介は女性が家に来ていることを樋口に言いたくないので、嘘をついた。］耕介「だまして悪かった」樋口「やっぱ嘘か」耕介「理由があるんだ」樋口「俺が嫌いなら嫌いだってはっきり言っていいんだぞ」耕介「実は、これから、川上さんと食事なんだ」樋口「……（驚愕）」耕介「家に彼女が来てるんだ」【今夜 64】

例 16　［麦田が暴れ回る子供達を静かにさせるため、いつも体育座りをさせるので、子供達のトレーナーの裾が伸びて広がっている］サイバラ「みんな妖精みたいだね」麦田「そんな言い方ちがうでしょ、正直に言って」サイバラ「すっげえ貧乏くさい」【毎日 10, 11】

いずれの例も、発話における表現選択が不適切であることに言及する発話である。例 11 から例 13 は、それぞれの表現選択の不適切さを批判するに止まっているが、例 14 から例 16 は不適切な表現をより適切なものに変えることを促している。

4-3　言語行動の素材・話題

例 17　［カモシダは妻と離婚した後、アルコール依存症で入院した。］ゴンゾ「まったくしょうがねぇなあ、別れてまで迷惑かけ通しじゃねえか」カモシダ「いいよもう、その話は」【毎日 25】

例 18　［耕介はフリーズした真琴のパソコンを直す。］耕介「また動かなくなったら言って下さい。僕、やりますから」真琴「なんか尊敬しちゃう」耕介「僕の話はいいよ」【今夜 127】

例 17、18 は、第一発話者の提示した話題に関する言及である。その話題を続ける意思がないため、第一発話者の発言内容には直接答えず、話題そのものを打ち切ろうとする発話を行っている。

4-4　表現の調子

例 19　古美門「男子中学生のほとんどは馬鹿だがね」黛「言葉に気をつけて下さい」【リーガル 97】

例 20　［真琴は醤油を飲んで自殺を図ろうとしたことがある。］真琴「初めまして」店長「醤油薄めて飲んだ人ね」耕介「そういうこと言うんじゃないよ」【今夜 86】

例 21　［かおりは妊娠後に結婚し、離婚した。］かおり「はああ、どこで間違ったかなあ、人生」友達 1「離婚じゃない？」友達 2「その前に結婚でしょ。相手の選択ミス」友達 1「つーか、それだったら妊娠じゃない。できちゃった結婚だもん、かおり」かおり「ちょ、ちょ、ちょっと、好き放題言わないで」【神聖 54】

例 22　黛「古美門は確かに無礼な発言をしました、というか無礼な発言しかしない人です！　でも、裁判長は個人的な感情で不当な対応をしています！」別府「無礼な発言ですね」黛「だってこれでは、ただの嫌がらせですよ！」【リーガル 119】

例 23　樋口「甘えてんじゃねえよ」真琴「（泣きべそ）」樋口「そんなことじゃ、何回も同じこと繰り返すよ、きっと。今度はどこ行くんだ、パリか、ロンドンか、イスタンブールか。どこ行ったってさ、自分の生き方変えないと、結局は同じことなんだよ」真琴「……」耕介「言い過ぎだよ」樋口「いいんだよ、これくらい言ったほうが」耕介「……言い

過ぎだよ」【今夜 77】

例 24　宮下「私に出来なくて、あいつに出来ることある？」山路「…ばっさり言ったね」【ゆとり 128】

例 25　［かおりは育児に疲れ、人生を後悔している。］かおり「はああ、やり直してー」友達 2「じゃあさ、あれは、養子に出すとかは？」友達 1「うわ、爆弾発言」【神聖 54】

例 26　［山路が女性と交際した経験がないことを話すと、麻生と正和が他の話題の合間に驚いて反応する。］山路「どうすかね、僕も経験ないから」麻生「経験ない？」山路「避けられてるとしたら、諦めた方がいいよね」麻生「経験ないって？」山路「いいから、さらっと流して（正和に）どう思う？」正和「だけどさ、そもそも向こうから告白して来て…経験ない？」山路「もう、流れそうだったのに！」【ゆとり 61】

これらの例を「表現の調子」という項目にまとめられるかどうかは、改めて検討したいが、第一発話者の述べ方や発話態度などに言及する表現である。例 19 から例 23 までは、第一発話者の発話態度がマナーや道徳などの社会規範に合わないことへの警告であり、例 24、25 は第一発話者の発話態度や述べ方に対する言及である。例 26 にはメタ言語表現が 2 回用いられている。三人の参加者は別の話をしていたが、「女性との交際経験がない」という山路の発話を受け、麻生と正和が驚いて「経験ないって？」と繰り返し確認するというシーンである。1 回目のメタ言語表現使用は第一発話者の麻生が「経験ないって？」と確認したのに対して応答者の山路が「いいから、さらっと流して」と言う箇所で、2 回目のメタ言語表現使用は第一発話者の正和が「経験ない？」と確認したのに対して応答者の山路が「もう、流れそうだったのに！」と言う箇所である。「交際経験がない」ということに拘る相手に対して、応答者が「拘らずに受け流す」という発話態度を要求する例である。

4-5　談話の進め方・規範

4-5-1　会話の開始・継続・終了

例 27　［酒屋の宗貴が本気搾りという地ビールを大量購入したが、まずくて売ることができない。宗貴と正和はそのことを和代に黙っていたが、正和は寝起きに突然聞かれる。］和代「なんで黙ってたの？」正和「え？　何いきなり…ああ、雑巾搾り」宗貴「おい！…本気搾りだ」【ゆとり 75】

例 28　［宗貴が酒蔵のガイドをしている途中で弟が婚約者を紹介し始める。］和代「…素敵なお嬢さんじゃない」ゆとり「妹のゆとりです」宗貴「いいんだよね続けて…あ、兄です（笑）」【ゆとり 105】

例 29　正和「そんなわけで結局、謹慎してない、焼鳥 2 本だけ焼きに行ってる、毎日、山ちゃんは？」そこへ麻生が駆けつけ、　麻生「すいません…（正和に）倅がお店にお邪魔しているそうで」正和「その話今終わったとこ」麻生「え？」【ゆとり 60】

例 30　［真琴が身の上話をする。長くなると言っていたが、予想外に短かく、料理の話に話題を変える。］真琴「これ、生クリームかけたほうが絶対おいしい」耕介「それで？」真琴「え？」耕介「それでおしまい？」真琴「そうよ」【今夜 71】

例 27 から例 30 は、会話の開始、継続、終了という談話展開に関することを相手に質問したり、自分から説明したりしている。

4-5-4 展開の順序、タイミング

例 31　［耕介は女性が家に来ていることを樋口に言いたくなく、嘘をついたが、本当の話をする。］耕介「実は、これから、川上さんと食事なんだ」樋口「……（驚愕）」耕介「家に彼女が来てるんだ」樋口「やったじゃねえか」耕介「そうなんだ」樋口「そういうことなら早く言えよ。だったら俺、泊まりに行けるわけないだろ」耕介「ごめん」【今夜 64】

例 32　山路「ピッチ早いっすね」正和「氷入れてっから、山ちゃんも何？

ソワソワしてっけど」山路「ええ!?」正和「ソワソワっつーかニヤニヤ？　聞いた方がいいやつ？」山路「告白されてしまいまして」正和「まだ聞いてないけど」【ゆとり 38】

例 33　正和「お友達は？」正和「漫喫泊まるって…小学校の先生なんだ、ていうか…なんで携帯変えたの？」宮下「その前に謝ってよ」正和「ああ、ごめんなさい」宮下「なにが？」正和「え？　ああ…えーと（言葉が出て来ない）」【ゆとり 30】

例 34　［正和は後輩からパワハラで訴えられる。青木は労働組合の代表］正和「いやいやいや（呆れ笑い）受注ミスがあったんです、行って謝るのは当然でしょう」青木「反論は後で伺います」【ゆとり 80】

例 35　まりぶ「ちょっと待てよ、その年下の彼氏は、なんで山ちゃんが童貞だって知ってんだよ」山路「（か細い声）それは追々説明します」【ゆとり 115】

例 36　［真琴が頭髪の薄い耕介にドライヤーのことを質問する。］耕介「僕はドライヤー、あんまり使わないんで」真琴、耕介の頭髪の薄さに初めて気付く。　真琴「ごめんなさい」耕介「……そこで、ごめんなさいって言わないで欲しかったなあ」【今夜 32】

例 31 から例 33 は、談話が応答者の期待と異なる展開の順序をとっているため、その流れ方に言及し、相手に不満を訴えている。例 34、35 は第一発話者の反論や質問に対する答えをいつ述べるかという談話の順序に言及しており、例 36 は第一発話者の発話のタイミングが悪いことに言及している。

4-5-5　割り込み

例 37　正和「見たの？」山路「見てないよ、見る前に前をこうされたんです」麻生「見ようとしたんじゃないですか」山路「なんだよ入ってくんなよ」【ゆとり 61】

例 38　耕介「馬場は？」樋口「うるさいな」耕介「馬場は、あの歳で、なん

でまだ戦ってるの？」樋口「……」耕介「ホントに強いの、馬場は」樋口「馬場さんのことは言うな」真琴「そうよ」樋口「あの人はあれでいいんだ」真琴「知らないくせに、口出さないでよ」【今夜 73, 74】

応答者は、第一発話者が自分の発話の途中に割り込んだことを指摘し、批判している。

5. まとめ

2 章で紹介した佐々（2015）の指摘のように、メタ言語表現は必ずしも談話展開や対人関係への配慮という目的でのみ用いられるわけではない。

言語活動の中で自分の欲求を実現させたり、相手に対する不満を表明したりするためにもメタ言語表現は用いられる。現段階では採取した用例数が限られているため、今回は用例の列挙に止めるが、個々の用例を検討していく過程で、そもそもメタ言語表現とは何かという定義が曖昧になってくることも感じた。用例数を増やし、より多くのデータの中で改めてメタ言語表現の定義と機能について論じたい。

用例資料

【今夜】三谷幸喜（1998）『今夜、宇宙の片隅で』第 1 回～第 4 回 フジテレビ出版
【ゆとり】宮藤官九郎（2016）『ゆとりですがなにか』第 1 話～第 4 話 KADOKAWA
【リーガル】古沢良太『リーガル・ハイ』（『ドラマ』5 月号、2013 映人社所収）
【毎日】真辺克彦『毎日かあさん』（『2011 年版年鑑代表シナリオ集』2012 シナリオ作家協会所収）
【神聖】入江悠『劇場版　神聖かまってちゃん　ロックンロールは鳴りやまないっ』（『2011 年版年鑑代表シナリオ集』2012 シナリオ作家協会所収）
【大鹿】荒井晴彦・阪本順治『大鹿村騒動記』（『2011 年版年鑑代表シナリオ集』2012 シナリオ作家協会所収）

注

1　Jakobson, R. 1960 Closing Statement: Linguistics and Poetics. In T. A. Sebeok, ed., *Style in Language.* Cambridge, MA: The MIT Press. 350−377

2 Hymes, D. 1962 The Ethnography of Speaking. In J. Fishman, ed., *Reading in the Sociology of Language.* The Hague; Paris: Mouton. 1968, 99−138

3 Hymes, D. 1972 Models of the Interaction of Language and Social Life. In J. J. Gumperz & D. Hymes, ed., *Directions in Sociolinguistics.* New York: Holt, Rinehart & Winston

参考文献

西條美紀（1999）『談話におけるメタ言語の役割』風間書房

佐々紘子（2015）「コンフリクト時に使用される日韓のメタ言語表現に関する研究」『日本語學研究』第 45 輯　韓国日本語学会 pp. 19−33

杉戸清樹（1983）「待遇表現としての言語行動―『注釈』という視点―」『日本語学』2 巻 7 号　明治書院 pp. 32−42

杉戸清樹（1989）「言語行動についてのきまりことば」『日本語学』8 巻 2 号　明治書院 pp. 4−14

中井陽子・寅丸真澄（2010）「講義の談話のメタ言語表現」『講義の談話の表現と理解』第 8 章　くろしお出版 pp. 153−-168

古別府ひづる（1997）「研究報告場面における留学生のメタ言語表現：口頭発表教材のシラバス化の可能性を探る」『山口県立大学国際文化学部紀要』3 巻 pp. 37-47

李婷（2013）「メタ言語表現の『文脈展開機能』」『早稲田日本語研究』22 pp. 1−12

Jakobson, R.（1980）Metalanguage as a Linguistic Problem. *The Framework of Language.* 池上嘉彦・山中桂一翻訳（1984）「言語学の問題としてのメタ言語」『言語とメタ言語』勁草書房 pp. 101−116

Stubbs, M.（1983）*Discourse Analysis: The Sociolinguistic Analysis of Natural Language.* 南出康世・内田聖二翻訳（1989）『談話分析―自然言語の社会言語学的分析』研究社出版